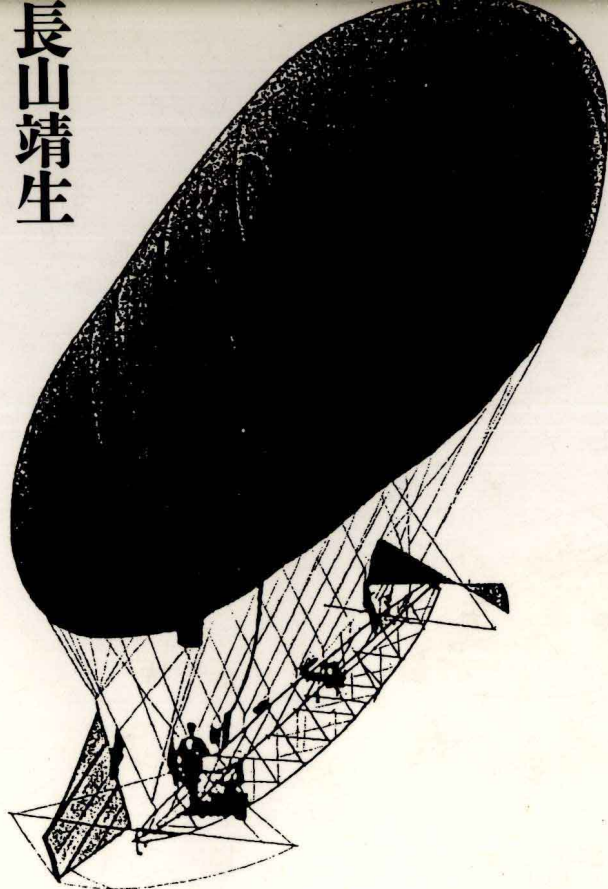


近代日本

長山靖生

の紋章学



モダンな幾何学的思想と邪悪なる精神。乱歩、虫太郎から小酒井不木、海野十三まで、ユートピアと戦争の時代を駆け抜けた冒険者達の夢見る眼差しを通し、近代日本の場所を検証する精神の系譜学。

きんだいにほん もんしょうがく
近代日本の紋章学

一九九二年十月三十日 第一版第一刷発行

長山靖生（ながやま・やすお）

一九六二年、茨城県生まれ。

歯学博士。鶴見大学歯学部研究員。

著書『コレクターシップ』（JICC出版局）、

共著に『新青年』読本』（作品社）、『別冊宝島

田号 巨人列伝』（JICC出版局）など。編

纂書に『海野十三全集』『少年小説大系』（三

書房）、『殺人論』『犯罪文学研究』（国書刊行会

などがある。

著者 長山靖生

発行者 矢野恵二

発行者 青弓社

東京都千代田区飯田橋一―五―八 東専堂ビル

電話〓〇三―三二六五―八五四八（代）

振替〓東京八―八九四五七

印刷所 平河工業社／伸光印刷

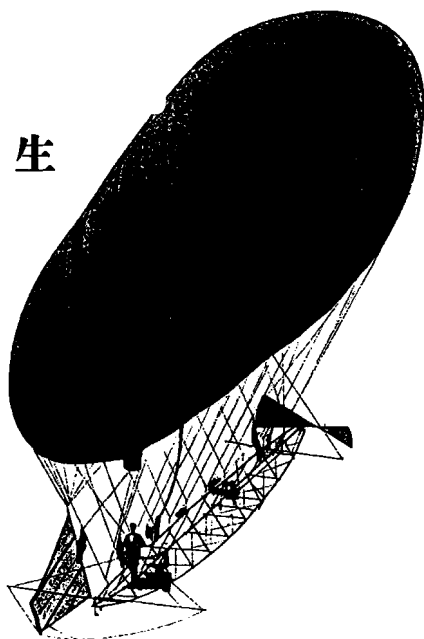
製本所 大口製本

©Yasuo Nagayama

ISBN4-7872-9069-X

近代日本

生



紋章学

モダンな幾何学的思想と邪惡なる精神。乱歩、虫太郎から小酒井不木、海野十三まで、ユートピアと戦争の時代を駆け抜けた冒險者達の夢見る眼差しを通し、近代日本の場所を検証する精神の系譜学。

青弓社

近代日本の紋章学／目次

I 夢見るモダニストたち

空飛ぶ作家たち——浮遊と飛行のヒエロファニー 9

モダンブランド
都市文化の買い手たち——あるいはモダニズムのイコノロジー 30

II モダンの跳梁

謎の遠近法——江戸川乱歩の眼差しをめぐって 51

小酒井不木と探偵王国 68

万有博士の二〇年代——医学、犯罪学、探偵小説、そして諸学の新しい波 93

海野十三と近代医学 114

結界のほうへ——小栗虫太郎の場をめぐって 124

III 喪失と逸脱のモダニズム

喪失の修辞学——牧野信一的眼差しをめぐって 141

預言と聖痕——海野十三の戦争小説について 137

南洋の神話学——南方ユートピアとゴジラ千年王国の夢 175

あとがき 207

初出一覧 211

装丁——鈴木堯十瀧上アサ子「タウハウス」

I
夢見るモダニストたち

空飛ぶ作家たち——浮遊と飛行のヒエロファニー

漱石の作中人物たちは、どうしたわけか胸中密かに気に掛けている肝心の問題は口にしないくせに、差し当たっての生活に無関係な事柄に関してはいたって饒舌な人間が揃っている。そして彼らは、たとえどんなに忙しい最中であっても呆れるほどの緩やかさでもって閑話ばかりを繰り返す。だが、だからといってその内容が呑気なものばかりだとは限らない。たとえばあるときは〈死〉という言葉が、次のような形でさらりと顔を覗かせている。

三四郎は要目垣の間に見える棧を外そうとして、ふと庭の中の話し声を耳にした。話は野々宮と美弥子のあいだに起こりつつある。

「そんな事をすれば、地面の上へ落ちて死ぬばかりだ」

「死んでも、そのほうが可いと思います」

「もっともそんな無謀な人間は、高い所から落ちて死ぬだけの価値は十分ある」

「残酷な事を仰しやる」

三四郎はここで木戸を開けた。

（『三四郎』）

もつとも、これだけでは話の委細が分からない。そのため三四郎は、なおしばらく黙って会話のなりゆきを追うことになる。

「野々宮さんは理学者だから、なおそんな事を仰しゃるんでしょう」と言いだした。話の続きらしい。

「なに理学を遣らなくっても同じ事です。高く飛ぼうというには、飛べるだけの装置を考えなくてはなればできないに極っている。頭のほうがさきに要るに違いないじゃありませんか」

「そんなに高く飛びたくない人は、それで我慢するかもしれません」

「我慢しなければ、死ぬばかりですもの」

「そうすると安全で地面の上に立っているのがいちばん好い事になりますね。なんだかつまらないようだ」

野々宮さんは返事をやめて、広田先生の方を向いたが、

「女には詩人が多いですね」と笑いながら言った。すると広田先生が、

「男子の弊はかえって純粹の詩人になり切れないところにあるだろう」と妙な挨拶をした。

野々宮はそれで黙った。よし子と美弥子は何かお互いの話を始める。

三四郎はようやく質問の機会を得た。

「今のは何のお話ですか」

「なに空中飛行器の事です」と野々宮さんが無造作に言った。三四郎は落語のおちを聞くような気がした。

ここで私が訝しく思うのは、なぜ漱石がライト兄弟の飛行機に言及しないのかというようなことではない。『三四郎』が書かれたのは明治四十一（一九〇八）年の八月から十月初めにかけて（新聞掲載は同年九月一日から十二月二十九日）であつたことを思えば、明治三十六（一九〇三）年十二月七日に初飛行を果たしたライト兄弟がまったく無視されているというのは、確かに一見奇妙なことのように感じられる。しかしながら、何ぶんにも初期の飛行機は「飛ぶ」というよりは「跳ぶ」道具にすぎず、どうしたものか大地を恋しがってばかりいて、ちょっと浮いたかと思うとすぐ地面にへばりついてしまう半製品で、稲垣足穂の言を借りるなら「飛行機は「草刈機」であり、飛んでいゝのか野菊を刈っているのか見当が付きかねるような代物だつた」のだから、漱石がこれを問題外と考えたとしても驚くには当たらないのかもしれない。

むしろ私が不思議に思うのは、そうした實在の飛行機をまったく知らないかにして遣り過ぐす漱石が、そのとぼけ方の裏で、高く空を飛びたいという願望を、美弥子の口を借りて二度までも「死」という言葉さえまじえて主張していることである。いったいに漱石自身は、それほどまでに空を飛びたいと思つたことがあつたのだろうか。漱石の作品にしばしば現われるのは飛行というよりむしろ

ろ浮遊のイメージであり、それこそが彼にふさわしいという気がしてならない。たとえば『野分』のなかに登場する、東京市の宙に浮かぶ目薬の広告気球は、まさにただ浮かんでいるだけの存在で、当初の目的を達成するためには地上の人間を金で雇って指差してもらわなければならないという、何とも役立たずで微笑ましい代物だった。これはあたかも書斎に籠っては居眠りばかりしている苦紗彌先生を彷彿とさせるオブジェである。

とはいえ勿論、漱石作品に「飛ぶもの」が姿を現わさないというわけではない。『それから』の主人公は次のようにして「飛ぶもの」を意識する。

代助は両手を額に当てて、高い空を面白そうに切つて廻る燕の運動を縁側から眺めていたが、やがて、それが目ま苦しくなったので、部屋の中へ這入った。

自分の心臓に手を当てて「まだ動いている」などと真面目に考えるほどに、行動に対しての自覚を欠いた存在である主人公は、無意識の中までも激しい運動の眺めを拒否しているかのようだ。

こうしてみると「高く飛びたい」という科白せうはくが、他でもない美弥子みやこの口から出されていたのが偶然ではなかったことが分かる。それはいわば魔女の予言じみたもので、主人公を不様な覚醒と行動へと駆り立てる誘いの呪文なのだ。それはあたかも『それから』の代助を、ぼんやりと横たわっては今はまだ自分の心臓は動いているなどと考える生活から「暑い中を駆けないばかりに、急ぎ足に歩い」ていくように仕向けさせたあの女のことを、我々に思い起こさせる。が、この主題は本項の

趣旨とは直接関係はない。

ともあれ我々としては、蓮實重彦氏が『夏目漱石論』で明らかにした「横臥すること」の意味を噛み締めつつ、飛行と浮遊のイメージを追っていくことにしたい。「横臥すること」と「歩くこと」と「浮かぶこと」の間にもまた、その動と静の対比の故に、空を舞台としながら、まったく別の心象が表わされていると考えるのが妥当なのではないだろうか。およそ対称的であるはずの「飛ぶこと」と「浮かぶこと」の差異性が、あまり問題にされないのは、地上からの上昇というイメージのなかには「飛ぶ」運動性」と「浮く」浮遊性」が混在していたためであつたからかもしれない。現実の手段としての気球や飛行機が存在しなかった時代には、具体的に両者のイメージを分割し難かつたのは、致し方ないことだったのであろう。だが、その実現後もしばらく続いた両者の説話的意味の混同は、心的な感覚世界での上空なるものへの知覚的混同からくるものばかりではなくて、おそらく実社会での利潤追求と直接結びついた制度的表象としての空の利用価値に由来しているだろう。

日本で最初に近代的な飛行に詩的表現を与えたのは佐久間象山だつたと思われる。彼はペリー艦隊来襲以降の幕府の弱腰外交を批判したある七言絶句を次の一句で結んでいる。

安得風船下聖東（いづくにか風船を得てワシントンに下る）

この主張がどこまで本気で、どこからが洒落であったのか、にわかには判断しかねるが、ともかく近代日本にとって飛行機械はまず空の黒船として意識されたのである。そして奇しくも、大東亜戦争の折、日本軍が最後の手段として象山の示唆を忠実に実行したかのような風船爆弾を使用してゐるのも興味深い。爾来、現実の気球も飛行機もその移入を積極的行なつたのは軍部だったことを、思い出しておく必要があるだろう。

明治十（一八七七）年五月八日付の「朝野新聞」に、次のような記事が見られる。

去る三日工部大学校にて試みられたる輕気球は南方へ行きしにより、有名の日日新聞には小笠原島辺の椰子の樹にでも引つ掛かつて居るのを、太陽の破片か擧丸の浪人かとさぞ驚いているであらうと書いてありましたが、チット方角が違ひ、同日下総香郡西田部村の畑中へ南風に吹き廻されフワフワとして落ちて来たのは、封嬢の風袋でもあるかと拾ひ揚げた品は、径り二丈五尺計り色は白茶にて其上に青漆の油紙を覆ひ、又其上に麻糸の網を着せ、篠竹にて作りたるザルが付いて居るので村の者は仰天し、直ぐ様田子出張所へ届け出たとの報知なり。

これだけ読むと開化期の微笑ましいエピソードのひとつとしか思われないが、事件の日付に注意するなら、この気球の実験はそもそも折からの西南戦争において軍用に供するために慌ただしく行なわれたものだったことに気付くだろう。実験失敗についても、急ぎすぎでの準備不足によるものだったかもしれない。ちなみに実戦において気球はめでたく九州の空に上がり、田原坂の自然を要

害として陣を布いていた西郷軍の背後を偵察するという天空の目玉の役割を無事果たしたのだが、仕事が遅れたのを苦にして切腹するものが出るなど、軍用ともなると気球もなかなかに物騒な代物だったのではある。

また飛行機についていえば、飛行機発明の世界的競争のなかで二宮忠八がライト兄弟に先立って飛行機の図面を完成させた例（予算の関係で製作はされなかった）や、明治四十三（一九一〇）年十二月十九日の徳川大尉による日本初の飛行（アンリーファルマン機による）など、やはり当初からそこには軍事技術としての側面が見え隠れしていることを認めないわけにはいかない。

ここでついでに触れておくと、呑気に浮かんでいるのが身上的気球だとて、当時はただ漂っていたらば済むというものではなく、時には「飛行」の意志を表出し、自ら主体的に運動しようと発奮することだってあった。押川春浪の『日欧競争 空中大飛行艇』（明治三十五年）は、自家製空中飛行艇に乗ってアフリカのサルマ湖に浮かぶ小島に咲く幻の花「虹色の花」を探し求めてくるという懸賞レースに参加する日本人の物語だ。これは民間人の個人的な競技への参加でありながら、近代オリピックよろしく、どうも愛国心というものがちらついている。なお飛行艇の名が示しているように、推進力を持った気球は当時実在していた。そもそも、初めて操縦可能な飛行艇を建造したのはフランスのアンリ・ジファールで、気球に蒸気エンジンを搭載した彼の飛行艇が空を飛んだのは一八五二年のことだった。さらに一八八四年にはフランスの兵器技術者シャルル・ルナルとアイサー・クレブスのふたりが電気飛行船を製作し、史上初の周回飛行に成功しているし、明治四十年前後ともなれば日本でも織機や潜行艇の発明で知られる斎藤外市や山田猪三郎らがそれぞれ独自の